
キミヲオモウナミダ

凜0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミヲオモウナミダ

【Nコード】

N5828H

【作者名】

凜O

【あらすじ】

中学3年生、長谷川優里は、正真正銘、才色兼備の女の子。そんな彼女の淡い恋を描きます。

0 #登場人物（前書き）

作者はまだ学生ですので、
未熟なところは、ご了承ください。

0 #登場人物

君を想う

優しくて 哀しい

僕の涙

登場人物紹介

長谷川 優里／3－2

成績優秀・容姿端麗、まさに才色兼備の女の子。
性格もよく、男女ともに人気者。
軽音楽部。

南 健斗／3－5

容姿端麗・スポーツ万能。

サッカー部副部長。

基本クールだが、ちょっと抜けてるところも。

優里の片思い相手。

加藤 杏奈／3－2

優里の友達。

明るい女の子。

バドミントン部、部長。

直生のことが好き。

沖野 直生／3－2

優里と幼馴染。

バスケット部。

杏奈の片思い相手。

登場人物は、

連載とともに増える予定ですので、

よろしく願います。

1 #不機嫌な朝

「好きな人、誰？」

そんな朝一番のメールで、起こされてしまった。

重たい目をカレンダーのほうに向け、一息つく。

4月7日。中学生最後のクラス替えの日だ。

「まだ、4時かぁ・・・。」時計のほうへ目を向け、起きあがった。

例のメールはチェーンメールだった。

また、寝る気にもなれず、ベッドの上でぼーっとしていたが、

やがてカーテンを開けた。

「優里ー！！」

「……なあに……？」

8時。学校へ向かうと、友達、加藤杏奈の姿が目に入った。

「なんで、そんなにテンション低いの？」

「いやー、そうでもないよ。」

「あんた、いつも寝てなさそうだもんね。」と、杏奈が皮肉まじりに笑った。

「それでね、クラス見たんだけど、同じだったよー！！ 2年連続だねー☆」

「……そおなの。じゃー、あたしも見て来よっかな…」

あくびをおさえながら歩き出した優里を、杏奈が追いかけた。

「で、何組？」

「2組1。担任は塚本せんせー。」先に歩いていた優里に、追いついた杏奈が答えた。

クラス表の前には、人だかりができていた。

後ろから覗くようになったが、背の高い優里には楽に見えた。

「あ、本当だ。2組だね。」

「他に、誰がいる？」優里より背の低い杏奈が尋ねた。

「んーと、沙耶でしょー、奈々でしょー、川崎さん……」

と、優里が女子の名前をあげていった。

「男子は？」

「男子ー？知らないよー。自分で見れば？」

「だって見えないんだもん。」

背伸びをしながら杏奈が言った。

「はいはい。」

えっと、安藤、竹内、中井……とか。

あと、直生も。」

「!?!? 嘘っ?!」

「よかったじゃん。」 と、優里がニヤツと笑って答えた。

沖野 直生は、優里が小学校に入る前から仲のいい男子。

いわゆる幼馴染で、杏奈が好きな人でもある。

「やったぁー……!!」 と、杏奈が顔をほころばせながら喜んでる。

「無邪気な奴め。」と、優里は横目で杏奈を見て、笑った。

「優里、うちらも、いこっかー。」

みんなが教室に入りはじめたのを気にしながら、杏奈が言った。

「うんー・・・」

優里はまだ、クラス表を見つめていた。

2#噂

2人が教室に入ると、もうすでに生徒がたくさんいて、自由に席に座って、話をしていた。

空いているのは、窓際の後ろのほうの席。

外も見えるし、後ろだし、なかなかいい席だ。

「そういえば、」 と、鞆を机の上に置いた優里が切りだした。

「うん？」 その前に座った杏奈がドサツつと乱暴に鞆を置いた。

「今日、変なメールが来たの。」

「メール？」

「うん。好きな人誰ー？って・・・。

知らないアドレスから。」

「・・・もしかしたら、優里のことが好きな人かもね。」

「何それ。ただのチェンメだよ。」 と、優里は笑い返した。

新しいクラスメート。

きれいに消された黒板。

机の上の落書き。

新学期らしいなと優里が思っていた、その時――

――ガラッ

「！！ 沖野 来た．．．。」 杏奈が『！！』と、反応した。

「あ、ほんとだ。」

杏奈は、沖野 直生が教室に入ってくるところを見つめている。

「杏奈、ほんと好きだね。」と、優里が苦笑いしながら言った。

「うん♪だっけかっこいいもん。」

「え、理由はそれだけ？（笑）」

「いや、そーじゃないけどー」と、杏奈が反論しようとした。・

「おはよ。」

「あ、直生。おはよ。」

直生が、優里たちの横へ来て、杏奈の言葉をさえぎった。

「悪いけど、隣いい？ 席空いてなくて。」と、直生が優里の隣の席を見ながら言った。

空いているのは、優里の横の席と、その後ろの席だけだった。

「うん、いーよ。」と、優里は笑顔で答えた。

横で、見ていた杏奈は、

「おはよっ！！！！」

負けじと、優里に負けない笑顔で言った。

「杏奈！、優里ちゃん、おはよー。」

駆け寄ってきたのは、綾。同じクラスになった女の子だ。

「あのさ、転校生くるんだって。すごい噂になってるよ。」

「え、嘘ー?!」

「うちのクラスか、1組に。・・・男子だって。」綾が語尾にハートをつけて言った。

「イケメン?!」そこが大事!と、杏奈が聞いた。

綾は、少しためて・・・

「イケメン。」

と答え、にっこり笑った。

それを聞いた杏奈は、もう「一大事」というようだ。

「どうしよー、惚れたらどうしよー。」

「ちょっと、杏奈。直生は?どうなの。」

あきれながら、隣の直生に聞こえないように優里が尋ねた。

3 #転校生

ガラガラッー

塚本先生が、教室に入ってきて、
1番前の席に座っていた男子を指名し、号令をさせた。

「起立 礼ー」

『おはようございますーす』

と、クラスに声が響き、再び ガタガタッと席に着いた。

「はい、おはようー。」

塚本先生は、40代ぐらいの男の先生。

ユーモアがあってなかなか面白い人だ。

「えーと、1年間よろしくお願いします。」

まずですねー、転校生がうちのクラスに来ますんで、紹介を」

そう言って、先生は外へでた。

そのとたん、みんながしゃべりだした。

「かつこいいかなあー」

と、杏奈も例外ではなく、後ろの席の優里の方に振り返った。

「何？ 加藤、いきなり転校生狙うわけ？」 と、隣から直生。

・・・直生に誤解されても知らないぞ・・・。

「はい静かにー。」

先生が、帰ってきた。

たぶん、職員室から転校生を連れて来たのだろう。

「はい、じゃあ入ってきてもらおう。」

皆、息を止めて、ドアの方へ神経を集中させている。

ガラッ

沈黙の中入ってきた、転校生。

彼の横顔は、

皆がかっこいいと騒ぐのも納得するほど、

整った顔だった。

「ねえ、優里…」

「ん？」

優里に問いかけながらも、杏奈の目は転校生を見つめていた。

「目ぼれて……信じる？」

「は？」

先生は、自己紹介を　というふうに、促した。

「宮本 凌っていいます。 よろしくお願いしまーす。」

「じゃあ、席は、沖野の後ろ。あそこの空いてるところ。」

「・・・はい」

教壇のところから、優里たちの方の席へと歩いてくる。

「やばい、やばい、近いじゃん!!」

と嬉しそうな杏奈の横を、転校生が通り過ぎた時、

優里は、ふと転校生の顔を見上げた。

同じく彼も、優里の方を見ていた。

席順が、わかりにくいと思うので・・・。

杏奈 誰か

優里 直生

空席 転校生

の席順です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5828h/>

キミヲオモウナミダ

2010年10月28日04時54分発行